

【伽藍】がらん

伊賀焼の伽藍石香合をご存知のことと思います。伽藍香合ともいわれます。『形物香合番付』では頭取に位置する評価の高い香合です。信楽など他の窯でも焼かれ、現代でも造り続けられている人気の香合です。

伽藍石香合の形は寺院の礎石、通称伽藍石をかたどったものです。四角柱を基本とし角を落としたもの、甲がわずかに盛り上がったもの、甲に円座のような盛り上がりがあるものなどがあります。

伊賀焼はビードロ・焦げ・土の景色が見所です。そもそも伊賀焼は数が少なく、小さな香合の中にこれらの景色が凝縮されている名品にはなかなか出会えないものです。

東京国立博物館の伊賀焼伽藍石香合は甲の円座にビードロがかかったみごとなものです。

<http://www.tnm.go.jp/jp/servlet/Con?pageId=B07&processId=02&colId=G193>

伊賀焼は信楽焼の流れを汲む焼^ズの陶器で、現在の三重県阿山郡阿山町に窯があります。茶陶としては天正年間から寛永年間にかけて特に栄え、水差・花入などに佳作を残しています。その後衰退・復興を繰り返し今日に至っているようです。

茶会記では、私の知る限り『天王寺屋会記』天正9年10月27日、宗及自会記に載る茶壺が初見です。密庵の墨跡と共に床に飾ったようです。その後約1年の間に宗及自会記に4回も会記に登場し、中には拝見の所望もあったところを見ると堺の町衆の間でちょっとした話題の壺であったことが想像できます。

さて、名称の元となった伽藍石とは建造物の構造のうえでどのような役割をはたしているのでしょうか。

古建造物の柱の立て方は穴を掘り柱を直接埋める、いわゆる掘立柱が最も古い工法です。掘立柱は木材の柱が湿気を帯び腐りやすいという欠点があります。

そこで礎石を据えてその上に柱を立てる工夫がなされました。この工法により柱は土に直接触れずに湿気を防ぐことができるのです。

礎石=伽藍石は古寺跡発掘の際に規模・伽藍配置を知る重要な手懸りになることはいうまでもありません。日本では飛鳥時代から寺院・宮殿などに見られます。当時は大陸・半島からの影響で、屋根も草葺から板葺、瓦葺と急速な発展が見られます。

古都の伽藍跡にたたくみ伽藍石を眺めながら「穴を刳れば躑になるな」などと想像するのは私だけではないでしょう。本物の伽藍石を露地の飛び石に転用している例も見うけられます。

伽藍という言葉はサンスクリット samghaaraama の漢訳で、僧伽藍摩→僧伽藍→伽藍となったようです。僧の集う神聖な場所という意味が本来の意味です。

そこから寺院を意味するようになり、現代では七堂伽藍・伽藍配置・禅宗伽藍など寺院の堂の居並ぶ様、および堂の配置計画を意味するようになりました。

大寺院を意味する七堂伽藍という言葉があります。

七堂は宗派により内訳を異にするそうですが、七堂伽藍とは全てのお堂を備えた伽藍という意味で、必ずしも七の数にこだわる必要はないと思います。

以下、寺院各堂の読み方・機能など一覧にします。茶会などで寺院に行かれる皆様にお役に立てば幸いです。

- ・ 三門[さんもん・山門とも書く 寺院の正門 主に禅宗寺院での名称]
- ・ 金堂[こんどう・仏像を安置する堂・伽藍の中心的堂]
- ・ 仏殿[ぶつでん・金堂に同じ 主に禅宗寺院での名称]
- ・ 塔[とう・仏舎利を安置する堂]
- ・ 講堂[こうどう・経典の講義や説教をする堂]
- ・ 法堂[はっとう・講堂に同じ 主に禅宗寺院での名称]
- ・ 鐘楼[しょうろう・梵鐘を吊り鳴らす堂 鐘つき堂]
- ・ 経蔵[きょうぞう・経堂とも 経典を納める堂]
- ・ 僧房[そうぼう・僧が寝起きする堂 広義に庫裏を含めることがある]
- ・ 庫裏[くり・寺院の台所 住職やその家族の住む場所となることがある]
- ・ 食堂[じきどう・僧が食事をする堂 庫裏=台所を含めることがある]
- ・ 浴室[よくどう・僧の風呂場]
- ・ 西浄[せいちん・便所]
- ・ 塔頭[たっちゅう・大寺院の別坊 本来は禅僧が師を偲び建てた墓守の住まい]

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~